ジャン・クリストフ

ロマン・ローラン

豊島与志雄訳

青空文庫

前がき

『ジャン・クリストフ』の作者ロマン・ローランは、西暦千八百六十六年フランスに生まれて、現在ではスウィスの山間に住んでいます。純粋のフランス人の血すじをうけた人で、するどい知力をもっています。世界中の人々がみなお互に愛しあい、そして力強く生きてゆくこと、それが彼の理想であり、そして彼はいつも平和と自由と民衆との味方であります。

これまでの彼の仕事は、いろいろな方面にわたっています。第一に、五つの小説があり、そのなかで『ジャン・クリストフ』は、いちばん長いもので、そしていちばん有名です。ここに掲げたのはその中の一節です。第二に、十あまりの戯曲があり、そのなかで、フランス革命についてのものと信仰についてのものとが、重なものです。第三に、十ばかりの偉人の伝記があり、そのなかで、ベートーヴェンとミケランゼロとトルストイとの三つの伝記は、もっとも有名です。第四に、音楽や文学や社会問題やそのほかにいろいろなものについて多くの評論があります。

彼はいま、スウィスの田舎に静かな生活をしながら、仕事をしつづけています。そして人間はどういう風に生きてゆくべきかということについて、考えつづけています。

（訳者）

クリストフがいる小さな町を、ある晩、流星のように通りすぎていったえらい音楽家は、クリストフの精神にきっぱりした影響を与えた。幼年時代を通じて、その音楽家の面影は生きた手本となり、彼はその上に眼をすえていた。わずか六歳の少年たる彼が、自分もまた楽曲を作ってみようと決心したのは、この手本に基いてであった。だがほんとうのことをいえば、彼はもうずいぶん前から、知らず知らずに作曲していた。彼が作曲し始めたのは、作曲していると自分で知るよりも前のことだったのである。

音楽家の心にとっては、すべてが音楽である。ふるえ、ゆらぎ、はためくすべてのもの、照りわたった夏の日、風の夜、流れる光、星のきらめき、雨風、小鳥の歌、虫の羽音、樹々のそよぎ、好ましい声やいとわしい声、ふだん聞きなれている、炉の音、戸の音、夜の静けさのうちに動脈をふくらます血液の音、ありとあらゆるものが、みな音楽である。ただそれを聞きさえすればいいのだ。ありとあらゆるものが奏でるそういう音楽は、すべてクリストフのうちに鳴りひびいていた。彼が見たり感じたりするあらゆるものは、みな音楽に変わっていた。彼はちょうど、そうぞうしい蜂の巣のようだった。しかし誰もそれに気づかなかった。彼自身も気づかなかった。

どの子供でもするように、彼もたえず小声で歌っていた。どんな時でも、どういうことをし

てる時でも、たとえば片足でとびながら往来を歩きまわっている時でも——祖父の家の床にねころがり、両手で頭を抱えて書物の挿絵に見入っている時でも——台所のいちばんうす暗い片隅で、自分の小さな椅子に坐って、夜になりかかっているのに、何を考えるともなくぼんやり夢想している時でも——彼はいつも、口を閉じ、頬をふくらし、唇をふるわして、つぶやくような単調な音をもらしていた。幾時間たっても彼はあきなかった。母はそれを気にもとめなかったが、やがて、たまらなくなって、ふいに叱りつけるのだった。

その半ば夢心地の状態にあきてくると、彼は動きまわって音をたてたくてたまらなくなった。そういう時には、楽曲を作り出して、それをあらん限りの声で歌った。自分の生活のいろんな場合にあてはまる音楽をそれぞれこしらえていた。朝、家鴨の子のように盥の中をかきまわす時の音楽もあったし、ピアノの前の腰掛に上って、いやな稽古をする時の音楽も——またその腰掛から下る時の特別な音楽もあった。（この時の音楽はひときわ輝かしいものだった。）それから、母が食卓に食物を運ぶ時の音楽もあった——その時、彼は喇叭の音で彼女をせきたてるのだった。——食堂から寝室に厳かにやっていく時には、元気のいい行進曲を奏した。時によっては、二人の弟といっしょに行列をつくった。三人は順々にならんで、威ばってねり歩き、めいめい自分の行進曲をもっていた。もちろん、いちばん立派なのがクリストフのものだった。そういう多くの音楽は、みなびったりとそれぞれの場合にあてはまっていた。クリストフは決してそれを混同したりしなかった。ほかの人なら誰だって、まちがえるかも知

れなかった。しかし彼は、はっきりと音色を区別していた。

ある日、彼は祖父の家で、そりくりかえって腹をつき出し、踵で調子をとりながら、部屋の中をぐるぐるまわっていた。自分で作った歌をやってみながら、気持が悪くなるほどいつまでもまわっていた。祖父はひげをそっていたが、その手をやすめて、しゃぼんだらけな顔をつき出し、彼の方を眺めていった。

「何を歌ってるんだい。」

クリストフは知らないと答えた。

「もう一度やってごらん。」と祖父はいった。

クリストフはやってみた。だが、どうしてもさっきの節が思い出せなかった。でも、祖父から注意されてるのに得意になり、自分のいい声をほめてもらおうと思って、オペラのむずかしい節を自己流にうたった。しかし祖父が聞きたいと思ってるのは、そんなものではなかった。祖父は口をつぐんで、もうクリストフに取りあわない風をした。それでもやはり、子供が隣の部屋で遊んでいる間、部屋の戸を半分開放しにしておいた。

それから数日後のこと、クリストフは自分のまわりに椅子をまるくならべて芝居へいった時のきれぎれな思い出をつなぎあわせて作った音楽劇を演じていた。まじめくさった様子で、芝居で見た通り、三拍子曲の節にあわせて、テーブルの上にかかっているベートーヴェンの肖像に向かい、ダンスの足どりや敬礼をやっていた。そして爪先でぐるっとまわって、ふりむ

くと、半開きの扉の間から、こちらを見ている祖父の顔が見えた。祖父に笑われてるような気がした。たいへんきまりが悪くなって、ぴたりと遊びを止めてしまった。そして窓のところへ走っていき、ガラスに顔を押しあてて、何かを夢中で眺めてるような風をした。しかし、祖父は何ともいわないで、彼の方へやって来て抱いてくれた。クリストフには祖父が満足しているのがよくわかった。彼は小さな自尊心から、そういう好意がうれしかった。そしてかなり機敏だったので、自分がほめられたのをさとった。けれども、祖父が自分のうちの何を一番ほめたのか、それがよくわからなかった。戯曲家としての才能か、音楽家としての才能か、歌い手としての才能か、または舞踊家としての才能か。彼はそのいちばんおしまいのものだと思いたかった。なぜなら、それを立派な才能だと思っていたから。

それから一週間たって、クリストフがそのことをすっかり忘れてしまった頃、祖父はもったいぶった様子で、彼に見せるものがあるといった。そして机をあけて、中から一冊の楽譜帖をとり出し、ピアノの楽譜台にのせて、弾いてごらんといった。クリストフは大変困ったが、どうかこうか読み解いていった。その楽譜は、老人の太い書体で特別に念をいれて書いてあった。最初のところには輪や花形の飾がついていた。——祖父はクリストフのそばに坐ってページをめくってやっていたが、やがて、それは何の音楽かと尋ねた。クリストフは弾くのに夢中になっていて、何を弾いてるのやらさっぱりわからなかったので、知らないと答えた。

「気をつけてごらん。それがわからないかね。」

そうだ、たしかに知っていると彼は思った。しかし、どこで聞いたのかわからなかった。…
…祖父は笑っていた。
「考えてごらん。」
クリストフは頭をふった。
「わからないよ。」
ほんとうをいえば、思いあたることがあるのだった。どうもこの節は……という気がした。
だがそうだとは、いいきれなかった……いいたくなかった。
「お祖父さん、わからないよ。」
彼は顔を赤らめた。
「ばかな子だね。自分のだということがわからないのかい。」
たしかにそうだとは思っていた。けれどはっきりそうだと聞くと、はっとした。
「ああ、お祖父さん。」
老人は顔を輝かしながら、クリストフにその楽譜を説明してやった。
「これは詠唱曲だ。火曜日にお前が床にねころんでうたっていたあれだ。それから、行進曲。先週だったね、もう一度やってごらんといっても、思いだせなかったろう、あれだ。それから三拍子曲。肱掛椅子の前で踊っていた時の歌だ。……みてごらん。」
表紙には、見事な花文字で、こう書いてあった。

少年時代の快楽――詠唱曲、三拍子曲、円舞曲、行進曲。ジャン・クリストフ・クラフト作品Ⅰ。

クリストフは目がくらむような気がした。自分の名前、立派な表題、大きな帖面、自分の作品！　これがそうなんだ。……彼はまだよく口がきけなかった。

「ああ、お祖父さん！　お祖父さん！……」

老人は彼を引寄せた。クリストフはその膝に身体を投げかけ、その胸に顔をかくした。彼は嬉しくて真赤になっていた。老人は子供よりもっと嬉しかったが、わざと平気な声で――感動しかかってることに自分でも気づいていたから――いった。

「もちろん、お祖父さんが伴奏をつけたし、また歌の調子に和声を入れておいた。それから……（彼は咳をした）……それから、三拍子曲に中間奏部をそえた。なぜって……なぜって、そういう習慣だからね。それに……とにかく、悪くなったとは思わないよ。」

老人はその曲を弾いた。――クリストフは祖父と一しょに作曲したことが、ひどく得意だった。

「でも、お祖父さん、お祖父さんの名前も入れなきゃいけないよ。」

「それには及ばないさ。お前よりほかの人に知らせる必要はない。ただ……（ここで彼の声は

ふるえた）……ただ、あとで、お祖父さんがもういなくなった時、お前はこれを見て、年とったお祖父さんのことを思い出してくれるだろう、ねえ！　お祖父さんを忘れやしないね。」

憐れな老人は思ってることをすっかりいえなかった。彼は、自分よりも長い生命があるに違いないと感じた孫の作品の中に、自分のまずい一節をはさみ込むという、きわめて罪のない楽しみを、おさえることができなかったのである。けれども、今から想像される孫の光栄に一しょに加わりたいというその願いは、ごくつつましい哀れなものだった。彼は自分が全く死にうせてしまわないようにと、自分の思想の一片を自分の名もつけずに残しておくだけで、満足していたのである。――クリストフは、ひどく感動して、老人の顔にやたらに接吻した。老人はさらに心を動かされて、彼の頭を抱きしめた。

「ねえ、思い出してくれるね。これから、お前が立派な音楽家になり、えらい芸術家になって、一家の光栄、芸術の光栄、祖国の光栄となった時、お前が有名になった時、その時になって、思い出してくれるだろうね、お前を最初に見出し、お前の将来を予言したのは、この年とったお祖父さんだったということをね……」

その日以来、クリストフはもう作曲家になったのだったから、作曲にとりかかった。まだ字を書くことさえよく出来ないうちから、家計簿の紙をちぎりとっては、いろいろな音符を一生懸命書きちらした。けれども、自分がどんなことを考えているかそれを知るために、そし

てそれをはっきり書きあらわすために、あまり骨折っていたので、ついには、何か考えてみようとするだけで、もう何も考えなくなってしまった。それでも彼は、やはり楽句（楽曲の一節）を組みたてようとりきんでいた。そして音楽の天分がゆたかだったので、まだ何の意味も持たないものではあったけれど、ともかくも楽句をこしらえ上げることができた。すると彼は喜び勇んで、それを祖父のところへ持っていった。祖父は嬉し涙をながし――彼はもう年をとっていたので涙もろかった――そして、素晴らしいものだといってくれた。

そんなふうに、彼はすっかり甘やかされてだめになるところだった。しかし幸なことに、彼は生まれつき賢い性質だったので、ある一人の男のよい影響をうけて救われた。その男というのは、ほかの人に影響を与えるなどとは自分でも思っていなかったし、誰が見ても平凡な人間だった。――それはクリストフの母親ルイザの兄だった。

彼はルイザと同じように小柄で、痩せていて、貧弱で、少し猫背だった。年のほどはよくわからなかった。四十をこしている筈はなかったが、見たところでは五十以上に思われた。皺のよった小さな顔は赤みがかって、人のよさそうな青い眼が色のさめかけた瑠璃草のような色合だった。隙間風がきらいで、どこでも寒そうに帽子をかぶっていたが、その帽子をぬぐと、円錐形の赤い小さな禿頭があらわれた。クリストフと弟たちはそれを面白がった。髪の毛はどうしたのと聞いてみたり、父親メルキオルの露骨な常談におだてられて、禿をたたくぞとおどしたりして、いつもそのことで彼をからかってあきなかった。すると小父はまっさきに笑

いだし、されるままになって少しも怒らなかった。彼はちっぽけな行商人だった。香料、紙類、砂糖菓子、ハンケチ、襟巻、履物、缶詰、暦、小唄集、薬類など、いろんなもののはいってる大きな梱を背負って、村から村へと渡り歩いていた。家の人たちは何度も、雑貨屋や小間物屋などの小さな店を買ってやって、そこにおちつくようにすすめたことがあった。しかし彼は腰をすえることが出来なかった。夜中に起上って、戸の下に鍵をおき、梱をかついで出ていってしまうのだった。そして幾月も姿を見せなかった。それからまた戻ってきた。夕方、誰かが戸にさわる音がする。そして戸が少しあいて、行儀よく帽子をとった小さな禿頭が、人のいい目つきとおずおずした微笑と共にあらわれるのだった。「皆さん、今晩は。」と彼はいった。はいる前によく靴をふき、みんなに一人一人年の順に挨拶をし、それから部屋のいちばん末座にいって坐った。そこで彼はパイプに火をつけ、背をかがめて、いつものひどい悪洒落がすむのを、静かに待つのであった。クリストフの祖父と父は、彼を嘲りぎみに軽蔑していた。そのちっぽけな男がおかしく思われたし、行商人という賤しい身分に自尊心を傷つけられるのだった。彼等はそのことをあからさまに見せつけたが、彼は気づかない様子で、彼等に深い敬意をしめしていた。そのため、二人の気持はいくらか和いだ。ひとから尊敬されるとそれに感じ易い老人の方は、殊にそうだった。二人はルイザがそばで顔を真赤にするほどひどい常談を浴せかけて、それで満足した。ルイザはクラフト家の人たちの優れていることを文句なしにいつも認めていたから、夫と舅が間違っているなどとは夢にも思っていなかった。しかし、

彼女は兄をやさしく愛していたし、兄も口には出さないが彼女を大切にしていた。彼等は二人きりでほかに身寄の者もなかった。二人とも生活のためにひどく苦労して、やつれはてていた。人知れず忍んできた同じような苦しみとお互の憐れみの気持とが、悲しいやさしみをもって二人を結びつけていた。生きるように、楽しく生きるように頑固に出来上ってる、丈夫な騒々しい荒っぽいクラフト家の人たちの間にあって、いわば人生の外側か端っこにうち捨てられてるこの弱い善良な二人は、今までお互に一言も口には出さなかったが、互に理解しあい憐れみあっていた。

クリストフは子供によく見られる思いやりのない軽率さで、父や祖父の真似をして、この小さい行商人をばかにしていた。おかしな玩具かなんかのように彼を面白がったり、悪ふざけをしてからかったりした。それを小父（小さい行商人）はおちつき払って我慢していた。でもクリストフは、知らず知らずに彼を好いてるのだった。第一に、思うままになるおとなしい玩具として、彼が好きだった。それからまた、いつも待ちがいのあるいいもの、菓子とか絵とか珍らしい玩具などを持って来てくれるから、好きだった。この小さい男が戻って来ると、思いがけなく何か貰えるので、子供たちはうれしがった。彼は貧乏だったけれど、どうにか工面して一人一人に土産物を持って来てくれた。また彼は家の人たちの祝い日を一度も忘れることがなかった。誰かの祝い日になると、きっとやってきて、心をこめて選んだかわいい贈物をポケットからとりだした。誰もお礼をいうのを忘れるほどそれに馴れきっていた。彼の方では、

贈物をすることがうれしくて、それだけでもう満足してるらしかった。けれど、クリストフはいつも夜よく眠れないで、夜の間に昼間の出来事を思いかえしてみる癖があって、そんな時に、小父はたいへん親切な人だと考え、その憐れな人に対する感謝の気持がこみ上げて来るのだった。しかし昼になると、また彼をばかにすることばかり考えて、感謝の様子などは少しも見せなかった。その上、クリストフはまだ小さかったので、善良であるということの価値が十分にわからなかった。子供の頭には、善良と馬鹿とは、だいたい同じ意味の言葉と思われるものである。小父のゴットフリートは、その生きた証拠のようだった。

ある晩、クリストフの父が夕食をたべに町に出かけた時、ゴットフリートは下の広間に一人残っていたが、ルイザが二人の子供をねかしている間に、外に出てゆき、少し先の河岸にいって坐った。クリストフはほかにすることもなかったので、あとからついていった。そしていつもの通り、子犬のようにじゃれついていじめた揚句、とうとう息を切らして、小父の足もとの草の上にねころんだ。腹ばいになって芝生に顔をうずめた。息切れがとまると、また何か悪口をいってやろうと考えた。そして悪口が見つかったので、やはり顔を地面に埋めたまま、笑いこけながら大声でそれをいってやった。けれど何の返事もなかった。それでびっくりして顔を上げ、もう一度そのおかしな常談をいってやろうとした。すると、ゴットフリートの顔が目の前にあった。その顔は、金色の靄のなかに沈んでゆく夕日の残りの光に照らされていた。クリストフの言葉は喉もとにつかえた。ゴットフリートは目を半ばとじ、口を少しあけて、ぼん

やり微笑んでいた。そのなやましげな顔には、何ともいえぬ誠実さが見えていた。クリストフは頬杖をついて、彼を見守りはじめた。もう夜になりかかっていた。ゴットフリートの顔は少しずつ消えていった。あたりはひっそりとしていた。ゴットフリートの顔にうかんでる神秘的な感じに、クリストフも引きこまれていった。地面は影におおわれており、空はあかるかった。星がきらめきだしていた。河の小波が岸にひたひた音をたてていた。クリストフは気がぼうとして来た。目にも見ないで、草の小さな茎をかみきっていた。蟋蟀が一匹そばで鳴いていた。彼は眠りかけてるような気持だった。

と突然、暗いなかで、ゴットフリートが歌いだした。胸の中で響くようなおぼろな弱い声だった。少しはなれてたら、聞きとれなかったかも知れない。しかしその声には、人の心を打つ誠がこもっていた。声に出して考えているのかと思えるほどだった。ちょうど透きとおった水を通して見るように、その音楽を通して彼の心の奥底までも読みとられそうだった。クリストフはこれまで、そんな風な歌い方をきいたことがなかった。またそんな歌を聞いたこともなかった。ゆるやかな単純な幼稚な歌で、重々しい寂しげな、そして少し単調な足どりで、決して急がずに進んでゆく——時々長い間やすんで——それからまた行方もかまわず進み出し、夜のうちに消えていった。ごく遠いところからやって来るようでもあるし、どこへ行くのかわからなくもあった。朗かではあるが、なやましいものがこもっていた。表面は平和だったが、下には長い年月のなやみがひそんでいた。クリストフはもう息もつかず、身体を動かすことも

出来ないで、感動のあまり冷たくなっていた。歌が終わると、彼はゴットフリートの方へはい寄った。そして喉をつまらした声でいいかけた。

「小父さん！……」

ゴットフリートは返事をしなかった。

「小父さん！」とクリストフはくりかえして、両手と顎を彼の膝にのせた。

ゴットフリートはやさしい声でいった。

「何だい……」

「それ何なの、小父さん。教えてよ。小父さんが歌ったのなあに？」

「知らないね。」

「何だか教えとくれよ。」

「知らないよ。歌だよ。」

「小父さんの歌かい。」

「おれのなもんか、ばかな……古い歌だよ。」

「誰がつくったの？」

「わからないね。」

「いつ出来たの？」

「わからないね。」

「小父さんの小さい時分にかい？」

「おれが生まれる前だ。おれのお父さんが生まれる前、お父さんのお父さんが生まれる前、お父さんのお父さんのそのまたお父さんが生まれる前だ……。この歌はいつでもあったんだよ。」

「変だね！　誰にもそんなこと聞いたことがないよ。」

彼はちょっと考えた。

「小父さん、まだほかのを知ってる？」

「ああ。」

「もう一つ歌って。」

「なぜもう一つ歌うんだい？　一つで沢山だよ。歌いたい時に、歌わなくちゃならない時に、歌うものなんだ。面白半分に歌っちゃいけない。」

「でも、音楽をつくる時はどうなの？」

「これは音楽じゃないよ。」

子供は考えこんだ。よくわからなかった。けれど説明してもらわなくてもよかった。なるほど、それは音楽ではなかった。普通の歌みたいに音楽ではなかった。彼はいった。

「小父さん、小父さんはつくったことある？」

「何をさ。」

「歌を。」

「歌？　どうして歌をつくるのさ。歌はつくるものじゃないよ。」
子供はいつもの論法でいいはった。
「でも、小父さん、一度は誰かがつくったにちがいないよ。」
ゴットフリートは頑として頭を振った。
「いつでもあったんだ。」
子供はいい進んだ。
「だって、小父さん、ほかの歌を、新しい歌を、つくることは出来るんじゃないか。」
「なぜつくるんだ。もうどんなのでもあるんだ。悲しい時のもあれば、嬉しい時のもある。疲れた時のもあれば、遠い家のことを思う時のもある。自分がいやしい罪人だったからといって、まるで虫けらみたいなものだったからといって、自分の身がつくづくいやになった時のもある。ほかの人が親切にしてくれなかったからといって、泣きたくなった時のもある。天気がよくて、いつも親切に笑いかけて下さる神様のような大空が見えるからといって、楽しくなった時のもある。……どんなのでも、どんなのでもあるんだよ。何でほかのをつくる必要があるものか。」
「偉い人になるためにさ……」と子供はいった。彼の頭は、祖父の教と子供らしい夢とで一ぱいになっていた。
ゴットフリートは穏かに笑った。クリストフは少しむっとして尋ねた。
「なぜ笑うんだい！」

ゴットフリートはいった。

「ああ、おれは、おれはつまらない人間さ。」

そして子供の頭をやさしく撫でながらきいた。

「お前は、偉い人になりたいんだね？」

「そうだよ。」とクリストフは得意げに答えた。

彼はゴットフリートがほめてくれるだろうと思っていた。しかしゴットフリートはきき返した。

「何のためにだい？」

クリストフはまごついた。そして、ちょっと考えてからいった。

「立派な歌をつくるためだよ。」

ゴットフリートはまた笑った。そしていった。

「偉い人になるために歌をつくりたいんだね。そして、歌をつくるために偉い人になりたいんだね。それじゃあ、尻尾を追っかけてぐるぐるまわってる犬みたいだ。」

クリストフはひどく気にさわった。ほかの時だったら、いつもばかにしている小父からあべこべにばかにされるなんて、我慢が出来なかったかもしれない。それにまた理窟で自分をやりこめるほどゴットフリートが利口だなどとは、思いもよらないことだった。彼はやり返してやる議論か悪口を考えたが、思いあたらなかった。ゴットフリートは続けていった。

「もしお前が、ここからコブレンツまであるほど大きな人物になったところで、たった一つの歌もつくれやすまい。」

クリストフはむっとした。

「つくろうと思っても……」

「思えば思うほど出来なくなるんだ。歌をつくるには、あの通りでなくちゃいけない。おききよ……」

月は野の向こうに昇って、まるく輝いていた。銀色の靄が、地面とすれすれに、また鏡のような水面に漂っていた。蛙が語りあっていた。牧場の中には、美しい調子の笛のような蟇のなく声が聞えていた。蟋蟀の鋭い顫え声は、星のきらめきに答えてるかのようだった。風は静かに榛の枝をそよがしていた。河の向こうの丘からは、鶯のか弱い歌がひびいてきた。

「いったいどんなものを歌う必要があるのか？」ゴットフリートは長い間黙っていてから、ほっと息をしていった。――（自分に向かっていっているのか、クリストフに向かっていっているのか、よくわからなかった。）――「お前がどんな歌をつくろうと、ああいうものの方が一そう立派に歌っているじゃないか。」

クリストフはこれまで何度も、それらの夜の声を聞いていた。しかしまだこんな風に聞いたことはなかった。本当だ、どんなものを歌う必要があるか？……彼はやさしさと悲しみで胸が一ぱいになるのを感じた。牧場を、河を、空を、なつかしい星を、胸に抱きしめたかった。そ

して小父のゴットフリートに対して、しみじみと愛情を覚えた。もう今は、すべての人のうちで、ゴットフリートがいちばんよく、いちばん賢く、いちばん立派に思われた。彼は小父をどんなに見違えていたことかと考えた。自分から見違えられていたために、小父は悲しんでいるのだと考えた。彼は後悔の念にうたれた。こう叫びたい気がした。「小父さん、もう悲しまないでね。もう意地悪はしないよ。許しておくれよ。僕は小父さんが大好きだ！」しかし彼はいえなかった。――そしていきなり小父の腕の中にとびこんだ。言葉は出なかった。彼はただくり返した。「僕は小父さんが好きだ！」そして心をこめて抱きついた。ゴットフリートはびっくりし、感動して、「何だ、何だ？」とくり返しながら、同じように彼を抱きしめた。――それから彼は立上り、子供の手をとっていった。「もう家へかえろう。」クリストフは自分の気持が小父にはわからなかったのではないかしらと、また悲しい気持になった。しかし家のところまで来ると、小父はいった。「また晩に、お前さえよかったら、一しょに神様の音楽をききに行こう。もっとほかの歌も歌ってあげよう。」そしてクリストフは、感謝の気持で一ぱいになって、おやすみの挨拶をしながら、抱きついた時、小父がよくわかってくれたのを見てとった。

それ以来、二人は夕方、しばしば一しょに散歩に出かけた。黙って歩いて、河に沿っていったり、野を横切ったりした。ゴットフリートはゆっくり煙草をすい、クリストフは夕闇が怖くて、小父に手をひかれていた。彼等はよく草の上に坐った。ゴットフリートはしばらく黙って

たあとで、星や雲の話をしてくれた。土や空気や水のいぶき、または闇の中にうごめいてる、飛んだりはったり泳いだりしている小さな生物の、歌や叫びや音、または晴天や雨の前兆、または夜の交響曲の数えきれないほどの楽器など、それらのものを一々聞きわけることを教えてくれた。時とすると、歌もうたってくれた。悲しい節の時も楽しい節の時もあったが、しかしいつも同じような種類のものだった。そしてクリストフはいつも同じ切なさを感じた。ゴットフリートは一晩に一つきり歌わなかった。頼んでも気持よく歌ってはくれないことを、クリストフは知っていた。歌いたい時に自然に出てくるのでなくてはだめだった。長い間待っていなければならないことが多かった。もう今夜は歌わないんだな……　とクリストフが思ってる頃、やっと小父は歌い出すのだった。

　ある晩、ゴットフリートがどうしても歌ってくれそうもなかった時、クリストフは自分が作った小曲を一つ彼に聞かしてやろうと思いついた。それは作るのに大へん骨が折れたし、得意なものであった。自分がどんなに芸術家であるか見せてやりたかった。ゴットフリートは静かに耳を傾けた。それからいった。

「実にまずいね、気の毒だが。」

　クリストフは面目を失って、答える言葉もなかった。ゴットフリートは憐れむようにいった。

「どうしてそんなものを作ったんだい。どうにもまずい。誰もそんなものを作れとはいわなかったろうにね。」

クリストフは怒って赤くなり、いいさからった。
「お祖父さんは僕の音楽をたいへんいいといってるよ。」と彼は叫んだ。
「そう！」とゴットフリートは平気でいった。「お祖父さんのいうことが本当なんだろう。あの人はたいへん学者だ。音楽のことは何でも知っている。ところがおれは、音楽のことはあまり知らないんだ。」
そして少し間をおいていった。
「だが、おれは、たいへんまずいと思うよ。」
彼はおだやかにクリストフを眺め、その不機嫌な顔を見て、微笑んでいった。
「何かほかに作ったのがあるかい？　今のより外のものの方が、おれの気にいるかも知れない。」
クリストフはほかの歌が小父の感じをかえてくれるかも知れないと思って、あるだけ歌った。ゴットフリートは何ともいわなかった。彼はおしまいになるのを待っていた。それから頭を振って、ふかい自信のある調子でいった。
「なおまずい。」
クリストフは唇をかみしめた。顎がふるえていた。彼は泣きたかった。ゴットフリートは自分でもまごついてるようにいいはった。
「実にまずい。」

クリストフは涙声で叫んだ。

「では、どうしてまずいというんだい？」

ゴットフリートはあからさまの眼つきで彼を眺めた。

「どうしてって……おれにはわからない……お待ちよ……じっさいまずい……第一、ばかげているから……そうだ、その通りだ……ばかげている、何の意味もない……そこだ。それを書いた時、お前は何も書きたいことがなかったんだ。なぜそんなものを書いたんだい？」

「知らないよ。」とクリストフは悲しい声でいった。「ただ美しい曲を作りたかったんだよ。」

「それだ。お前は書くために書いたんだ。偉い音楽家になりたくて、人にほめられたくて、書いたんだ。お前は高慢だった、お前は嘘つきだった、それで罰をうけた……そこだ。音楽では、高慢になって嘘をつけば、きっと罰があたる。音楽は謙遜で誠実でなくてはならない。そうでなかったら、音楽というのは何だ？　神様に対する不信だ、神様をけがすことだ、正直な真実なことを語るために、われわれに美しい歌を下さった神様をね。」

彼はクリストフが悲しがってるのに気がついて、抱いてやろうとした。しかしクリストフは怒って横を向いた。そして彼は幾日も不機嫌だった。小父を憎んでいた。——けれども、「あいつはばかだ、なんにも知るもんか！　ずっと賢いお祖父さんが、僕の音楽をすてきだといってくれてるんだ。」といくら自分でくり返してみてもだめだった。心の底では、小父の方が正しいとわかっていた。ゴットフリートの言葉が胸の奥に刻みこまれていた。彼は嘘をついたの

がはずかしかった。

それで、彼はしつっこく怨んではいたものの、作曲をする時には、今ではいつもゴットフリートのことを考えていた。そしてしばしば、ゴットフリートがどう思うだろうかと考えると、はずかしくなって、書いたものを破いてしまうこともあった。そういう気持をおしきって、全く誠実でないとわかっている曲を書くような時には、気をつけてかくしておいた。どう思われるだろうかとびくびくしていた。そしてゴットフリートが、「そんなにまずくはない……気にいった……」とただそれだけでもいってくれると、嬉しくてたまらなかった。

また、時には意趣がえしに、偉い音楽家の曲を自分のだと嘘をいって、たちのわるい悪戯をすることもあった。そして小父がたまたまそれをけなしたりすると、彼はこおどりして喜んだ。しかし小父はまごつかなかった。クリストフが手をたたいて、喜んでまわりをはねまわるのを見ながら、人がよさそうに笑っていた。そしていつもの意見をもち出した。「うまくは書いてあるかも知れないが、何の意味もない。」——彼はいつも、クリストフの家で催おされる小演奏会に出席したがらなかった。その時の音楽がどんなに立派なものであっても、彼は欠伸をしだし、退屈でぼんやりしてる様子だった。やがて辛抱出来なくなり、こっそり逃げ出してしまうのだった。彼はいつもいっていた。

「ねえ、坊や、お前が家の中で書くものは、どれもこれも音楽じゃないよ。家の中の音楽は、部屋の中の太陽と同じだ。音楽は家の外にあるものなんだ、外で神様のさわやかな空気を吸う

時なんかに……。」

あとがき

クリストフはその後、偉い音楽家になりました。彼の音楽はいつも、彼の思想や感情をありのままに表現したもので、彼の心とじかにつながってるものでありました。そして彼がえらい音楽家になったのは、ゆたかな天分と苦しい努力とによるのですが、また幼い時にゴットフリートから受けた教訓は、ふかく心にきざみこまれていて、たいへん彼のためになりました。

青空文庫情報

底本：「日本少国民文庫　世界名作選（一）」新潮社
　　1998（平成10）年12月20日発行
底本の親本：「世界名作選（一）」日本少國民文庫、新潮社
　　1936（昭和11）年2月8日
入力：川山隆
校正：門田裕志、小林繁雄
2008年1月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャン・クリストフ

ロマン・ローラン

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　豊島与志雄訳
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/